
黒鬼の獄門番（仮）

デルタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒鬼の獄門番（仮）

【Nコード】

N6924Y

【作者名】

デルタ

【あらすじ】

ベタの限りを尽くしたような練習作です。

初投稿ですので、適当に目を通してでも頂ければ光栄です。

オリキャラ設定（前書き）

とりあえずオリキャラ設定

出来れば週2投稿でがんばります

オリキャラ設定

主人公

とういなかば
東夷半

性格は前向きで、基本的にはのんびりしている。

世間に名を知らしめた大企業の氣に双子の弟として生まれるも、

なぜか家では代々女の方が優れていると言う伝統のようなものがあり、

半はその通りに姉の仙客せんかくは希代の天才、

半は普通の男子といった具合になっており、

それが原因で母親から虐待を受けた。

半が小三の時に会社の不正な行為が表に出て、

それが原因で芋蔓式に虐待が発覚、

母親は逮捕され会社は倒産

その後里親に預かられ、

その時に姉とは離ればなれになる。

現父親の会社はISの研究、開発が行われており、

半はその企業代表のパイロットと言う扱いで、

専用機を持っている。

髪を肩くらいまで伸ばしている。

半に対して‘男のくせに’は禁句

主人公の姉

しんかんせんかく
晨桓仙客

半の双子の姉で、弟想いのいい姉だが、

半が虐待を受けたのは自分のせいだと思っており、
半を避けている。
専用機は無い。

長い黒髪を腰のあたりまで伸ばしており、
スタイルも整っている。

開発能力に驚くほど長けており、小一で家の会社で働き、
優秀な功績を残すほどの鬼才。
束には負ける。

オリキャラ設定（後書き）

姉は結構後になります

1 話（前書き）

よろしくお願いします

1話

どうも、はじめまして。

東夷半です。

突然ですが、ここはIS学園の一年一組です。

ある日いきなりISに乗れる男性が現れたとのニュースが流れ、

そのせいで家の会社でも男性のIS適正検査が執り行われた。

最後の一人として少しだけ期待して適当に検査に取り組んだところ、
乗れた

その後いろいろあってIS 学園に入学した俺だが、正直人と関わりたくない、

なにせ里子であることが原因で小学校では虐められ、
中学でも友達のいなかった俺は、人との関わり方を知らない。

なので、何も期待されないことを期待していたのだが・・・

無理でした。

席は教室の一番後ろ真ん中で、

普通ならジロジロ見られたりしないはずのだが、

横から、前から、

――そして気のせいだと思いが後ろからも視線が、

ダメだ、どうしよう。

また虐められたり、しない
——といいな

とりあえず周りと関わりたくない、と言う俺の幻想はぶち殺されそう。

1 話（後書き）

第三者視点なんて文才のない主には無理です。

2 話（前書き）

なにとぞ御慈悲を

2話

どうも、こんにちは、東夷半です

周りの人を避けることが無理だと悟った俺は、がんばって友達とやらを作ろうと軽く決心した。

とりあえず副担任の紹介が終わったようなので自己紹介タイム
それにしてもあの副担任いろいろと大丈夫だろうか？

子供のような、なんというか頼りない雰囲気だ。

・・・絶対間違えてプリント捨てたり、何も無い所でこけたりする
人だよこの人。

まあそんな雰囲気の方に胸は・・・ごほんごほん

さて、そんな事考えていたら、もう一人の男性IS操縦者の自己紹介だ。

名前は、えーと、おりなんとかさんだ。

「えー・・・えつと、織斑一夏です。よろしく願いします。」
頭を下げて自己紹介、

礼儀正しい人かな？変わった名前だな、とか思っで見ていると、
周りの女子から織斑くんへの視線がすごい。

何か言っておいた方がいいぞ。

「以上です。」

ーーーーおいっ！

思わずずっとこけた。

さすがにそこは何か言っとけよ！

スパアン！

ここでいつの間にか担任登場

痛そうだなー、あれ、

角度とか速さとか完璧だぞ。

とりあえずSHRで分かったのは担任が織斑くんの姉だと言ったことと、担任が鬼と言ったことだった。

2 話（後書き）

ありがとうございます。

3話

(前書き)

D A B U N

こんな感じではないです。

3話

ども、こんちは、東夷半です。

1時間目が終わり、机でくつろいで――

もとい、くつろぎたい俺の周りからの注目と視線のプレゼント。く観察の空気を添えてくを受けている。

誰か勇気を出してくれ、俺も話かけれないから。

このままこの休み時間は終わるのだろうか、織斑くんもいないし。

「ちょっと、よろしくて？」

おお、話かけてくれた！しかしすごい態度だな、警戒態勢に入ろう。

「よろしいけども何？」

「バカにしていますの！？」

してねえよ、警戒はしてるがな。しかし堪えよう、キレたら負けだ。

「すみませんでした。しかしまずは名乗って頂けませんか？」

「あら、素直でよろしくつてよ、このわたくしはセシリア・オルコット、イギリスの代表候補生ですわ。」

ほほおエリートさんか、

しかしこの人絶対男子を見下してんな、今後距離をおこうか、

「代表候補生さんが俺になんの用ですか？」

「まずは挨拶をしておこうかと思ひまして、それに男子ならばISの知識が欠乏しているでしょうから、泣いて頼むならなら教えてあげなくも——「事足りています。」なっ!？」

やべ、キレさせた。

「あ、あなた——『キーンコーンカーンコーン』」

しかし直後に鳴ったチャイムに助けられた俺だった。

「覚えてなさい！」

警戒対象としてな。

3話

(後書き)

テスト期間があらわれた！

デルタは心と目の前が真っ暗になった！

てな訳でしばらく投稿きついです。

本当にすいません！

こんな私ですがこれからも時間があればよろしくお願いします！

4話（前書き）

短いです、ごめんなさい。
次から長めになると思います。

4話

ども 東夷です

二時間目が終わり、女子校的なノリ以外、授業に問題はない。

授業は、な。

休み時間、もといバトルロイヤル開始ーいえーい
さあさあ全方位から視線の集中放火だ！

専用機があれば絶対防御でどうにかなるかなあ

そう言えば俺は今度専用機が届くらしい、
父親一（といっても義理の…）会社で作られていらしく、性能は多
分大丈夫だが、強すぎるのは駄目だ。

過度な力なんて、ロクな結果が出ない、人が傷付くだけだ。

第一強すぎる機体なんて、乗ったって楽しくない。
一応、スポーツだぜ、あれ。

そんな事考えてたら、教室の前の方でおりむ…ら（でよかったっけ）
くんとセシリア嬢が喋ってる。

というか周りの女子がそっちを見ていて俺に視線がこない。

のんびり寝れそ『キーンコーンカーンコーン』

あゝあ。

寮に帰ったら存分に寝てやる！

5 話（前書き）

ノリにちょっと無理がありますがどうかご慈悲を。

5話

ちわーっす 半です

会議なう

というのもクラス代表を決めるとかなんとか

女子の手が上がる

「私は織斑君がいいと思います！」

「私は東夷君で！」

「やっぱり織斑くんでしょ！」

「東夷くんの方がいい！」

てな訳で俺と織斑くんが同率一位でおわ「納得いきませんわ！」

――らなかったか。

まあ俺もクラス代表なんて嫌だし

「男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！」

――男が恥？

「わたくしにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか
！？」

屈辱？

他にも日本の事とか言ってたがどうでもいい。

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ、不味い料理何年覇者だよ」

――んな事あどーでもいいんだよ、だがなあ！

「男を馬鹿にすんじゃあ無え！」

机を思いっきり叩いて立ちあがる

「男が恥だあ！？」

その程度で屈辱だあ！？

そんな考えのヤツのせいで俺が、世界の男が、どんな目に会って、どんな心情になってるか、考えたことあんのかよ！

その程度の事も考えられ無えなら軽口きいてんじゃねえ！

ブチ殺・『言いすぎだ、もうやめろ』何だよ男子

「お前にも何か有るんだろうけど、言い過ぎだ。

一回落ち着け。」

ああ、またやつちまった。

「・・・その通りだな、ごめん、言い過ぎた。」

そう謝って席に座「決闘ですわ！」りたかったのに・・・

まあおれがボロクソ言ったのが悪いんだしおれはいいけど

「貴方もですわ！」

「俺も！？」

指を指された織斑くんが怯む

まあそつちもいろいろ言ってたしな。

しかし問題は――

「先生、そんなことしてもいいんですか？」

「いいだろう、では勝負は来週の月曜だ。」

しかしISの操作時間やアリーナの使用可能時間を考慮し、織斑と東夷の勝った方がオルコットと勝負しろ。

それでいいな？」

「「はい」」

「それでは授業を始める。」

6 話（前書き）

遅れてすいません。

次からあとがきのところ使って長めにしてみます。

6話

東夷です。

代表決定会議が終わり、今は放課後。

俺の暴走を防いでくれたイカスあんちきしょうこと織斑君が机でダ
しているのでさっきの礼も兼ねて話かけよう。

「よう。さっきはありがとな。織斑君。」

「一夏でいいよ、後、そっちも別にいいよ。」

うん。いい奴だ。こんちきしょうめ。

「そう言えば、なんであんなに怒ってたんだよ、東夷」

んなこと聞くか。あんま詳しく話したら思い出すから嫌なんだが。

「半でいいよ。一夏。」

まああれだ、いわゆるトラウマというか、あんま思い出したく無い
ことと言っか、

まあ昔ちよつとあつてな。」

「そうか、

今度対戦することになってるけど、仲良くしてくれよな、半。

あとなんかあつたら相談しろよ。」

ある程度察してくれたようだ。

「こちらこそ、一夏。」

にしても濃い一日だった。

寮に行ったら寝たい。

そう言えば寮の部屋ってどうなるんだろうか。ホテルから通学だっ
け？

「ああ、二人ともいたんですか。」

山田先生タイミングいいな。てか何の用だろう。

「なんとですね、二人の部屋が決定しました！」
本当にタイミングいいな。

「で、どこなんですか？」

「二人とも相部屋です！というわけで案内しますね。」

6 話（後書き）

（移動中）

にしてもタイミング良すぎだろ、多分これは織斑先生の得意とする未来予知による先読みか？ならば罠に警戒せねば！

すぱーん

「誰が超能力者だ。」

出席簿痛いです、止めてください先生。しかしテレパシーまであるとは、これでこの先の罠は回避不能と言う訳か。
ぱしーん。

すいませんごめんなさいもうしません。

「なあ半、」

どうした一夏、今先生に殴られて忙しいんだが。

「今度試合する相手に言うのも何だけどさあ、勉強教えてくれないか、」

両手を合わせて頼んで来る一夏。まあ余裕はあるしな。――けどまず

「試合終わったらな。」

「わかった、ありがとな半。」

いいて事よ。

7 話（前書き）

なんか変な所で切れた
機体の内容は結構適当です。

7話

よう、東夷だ。

今、俺はアリーナのピットにいる。

というのも今日は一夏と戦う日だ。

そして、今日やっと専用機のお披露目である！

なんで当日に届いたかと言うと、一夏のが当日に届くからだ。ハンデを無くすためだそうだ。

リフトの作動音が響き、注意を促すアナウンスが流れる。
そしてリフトに乗って上がってきた。

そこに、『黒』がいた。

反対のピットから何かの電波を受信してそんな感想を思った後、改めて機体を見る。

そのISは、纏うと一切肌が出ず、遠くから見るとただの鎧のようだった。

全てが黒く、ひび割れるように肉抜きされたかなり薄い装甲の隙間からは、配線と、かなりの数のスラスタが見える。

ところどころにこれまた赤黒いひび割れのようなラインが入っていて、それが右手一本に集中していてそれは血管のようにも見えた。

地獄からはい上がってきたようなその鎧の名は――

『ブラックオウガ』

対刃耐寒耐熱対衝撃の名瀬ちゃん特製スーツじゃないよー

「東夷くん、どうですか？君の専用機は。」

馬鹿な！山田先生に後ろを取られるだー！？

とりあえず落ち着こう。

その後聞いたこの機体の説明をまとめると、

7 話（後書き）

その1、やたらと付いてるブースターは、移動や回避行動に使えるので機動性を高めるのと、腕のブースターで腕力まで上がるスグレモノだが、人間の脳の処理能力じゃあまず100%の能力を引き出せない欠陥品。

その2 ブースター多すぎてPICオートとか無理、てめえでやりやがれ。

その3 お楽しみなので詳しく言わないが、特殊兵器は殺人とか対ISでも結構いけちゃうから注意

だそうです。

ふざけんな。

欠陥品ついてたり初心者にやたらハイレベルな技術要求した挙げ句、殺人可能兵器とか

冗談じゃねえぞコラ。

特殊兵器使いこなしたらまずてめえから殺しに行つてやるよバカ研究者ども。

しかし一夏相手にこんな機体で行けるかな

あいつのISまで欠陥品な訳も無いし

まあとりあえず行けるとこまでがんばろう。

そうして俺はピットを飛び出した

8話 代表決定戦 一回戦 その一（前書き）

PV3000達成しました。

このような駄文におつきあいいただき有り難うございます。

今回もまた変な所で切れたんですが、誰かv i t aの文字数制限何文字かわかる人いませんか？
増えてるかどうか気になりました。

主人公の機体の細かいスペックは一次移行したらUPします。
あと、次は前書きから本文を突っ込むかもしれません。

8話 代表決定戦 一回戦 その一

よう、東夷だ。

現在試合開始待ち。

一夏のISは白か。名前はなんなんだろう。

「よう一夏。」

お手柔らかに頼む。」

特訓とかしてたらしいし、試験官も倒したらしいからな。

「こつちこそな、半。」

つうか半、その機体大丈夫か？ヒビはいつてるし、装甲薄いぞ。」

仕様だよ、多分。

「大丈夫だ、多分。」

「多分って…」

「まあ…どうでもいい。」

「いいのかそれは!？」

「ああ、いいからさつさと構えろ、さつさとしねえと始まるぞ。」

その一言で気付いた一夏は構えると空気が変わる、

先ほど喋っていたとは思えない程その場の空気は張り詰めている。

そして試合開始のブザーが鳴る。

それと同時に突っ込みとりあえず目に入った武器の『ツインブレード』を展開し一夏に切り掛かる。

全身にくまなく付いているブースターによる加速はすさまじく、あつと言う間に距離を詰める。

そして『ツインブレード』を左右から同時に振り下ろす。

しかし一夏は展開していたブレードで受け止めていた。

そして『ツインブレード』を弾いて切りかかるが、半はそれをブースターを使って回避する。

しかし一夏はそこから追撃を浴びせようと横にブレードを薙払う。

8話 代表決定戦 一回戦 その一（後書き）

しかしそれもまた避ける、そして反撃を試みるが、一夏に弾かれる。

斬る、弾かれる、避ける、斬る弾かれる避ける斬る弾く避ける

しばらく続いた斬り合いで一夏も防ぎ損ねる時もあるが、それより俺が避け損ねる回数の方が増してきた。

なにせこちらはP I Cをオートで使わなくてはならないのだから避け損ねて当然だ。

このままではまずいと思い、一旦一夏と距離をとる。

そして『マシンガン』を両手に呼び出し距離を取りつつ打つ。

機動性はこちらの方が高いから射撃戦のほうがこちらに分はある、

と思ったんだが一夏はあるう事かこちらに突っ込んで来た。

焦った俺は『荷電粒子砲』をとっさに呼び出し一夏に撃つ。

そして高威力の荷電粒子砲の一撃を受けた一夏はアリーナの壁にぶつかり、土煙を盛大に巻き上げた。

そしてその中から出てきたI Sは形が変わり、そして気のせいか輝いて見えた。

9話 代表決定戦 一回戦 その二（前書き）

砂煙の中から出てきた一夏のISは、表面の凹凸が消え、シャープな整ったラインが美しく、そして気のせいかうっすら輝いているように見えるほどきれいな白だった。

――敵機体の初期化と最適化を確認。注意してください。

視界に現れた文字で理解した。

あれが一夏の乗るISの本来の形、ここからやっとなのISが本来の力を発揮する事ができるのだと言うことを。

――つまりは

「反撃開始ってか？」

「ああ、そんな所だ。」

「させると思っただか！」

それと同時に『荷電粒子砲』を放つが、距離があつたため避けられる。

そして一夏がブレードを持って突っ込んでくる。

もつと他に武器はないのか？一夏よ。

突っ込んで来る一夏を『サブマシンガン』で迎撃しつつ距離を取るが、なにせPICがマニュアルなので、そんなに速度が出ない。

まったく、なんでマニュアルなんだよ、一夏の迎撃に集中できず、しかも追いつかれる。

『ツインブレード』を呼び出し、一夏のブレードを受け止めた俺は、また押し負けないように策を考え、そして思い出す。腕にブースターが付いている意味を。

腕部ブースターを使い、その推進力で一夏のブレードを弾く。なるほど、こりや便利。

9話 代表決定戦 一回戦 その二

そしてブレードを弾かれてがら空きの一夏の腹にブレードを思いっきり叩きこむ。

ブースターの補助付きの高速突きを、腹のど真ん中に。あまりの威力に吹っ飛ぶ一夏。

しかしどうにか十メートルぐらいでブースターを使いふんばる。

そしてそこから、意を決した突撃、と同時に一夏のブレードから光が溢れ出す。

「まだまだ負けるかあああ！」

そして――

『試合終了、勝者、東夷半――』

「「え？」」

くくピット前廊下くく

「お前のも欠陥機か、一夏」

「ああ、武器はブレードだけだぞ、無茶だつて。」

「まあそんな感じの方が似合ってるぜ、一夏は。」

「どうゆう意味だよ……」

しかしまあ、いい所でミスりやがって。

「この馬鹿め」

「ひでえぞ、皆して言いやがって。」

「まあ、真実はさておき」

「嘘だと言ってくれ。」

「俺の方も困ったもんだよ。」

「ああ、PICとかな。」

「第一誰かさんが粘ってくれなかったせいで一次移行もまだだしな。」

「俺のせい!？」

「誰かさんのせい。」

「俺だろそれ。」

「さあ？」

横で疲れたと言う表情の一夏。

にしても俺も疲れた。はやくシャワー浴びて寝「そこのお二方、少しお待ちになさい!」 - たかったのに。

9 話 代表決定戦 一回戦 その二（後書き）

「ふふふ、話は聞いておりましてよ、わたくしがせっかく戦ってあげると言うのに、乗る機体が欠陥機では、結果がみえてましてよ。」
疲れてるから早く済まそう。

さあ行け一夏！

「だから何だよ。」

ぐっじよぶ一夏。

「なんと雑な、まあよろしいでしょう、わたくしは優しいので、一つ忠告に来てあげたのですわ。」

あなたも大勢の前で恥をかきたく無いでしょうから、今泣いて許しをこつなら、降参を認めてあげてもよくつてよ。」

「誰がすんだよ馬鹿。」

「――っ!？」

ヤバい、キレてる

すんごいキレてる、

かなりキレてる。

そしてISを部分展開し――

織斑先生に叩かれるオルコット。

「馬鹿者、ISの無断展開は校則違反だ。」

罰は反省文十枚で済ませてやる。私は優しいからな。」

「なっ、――覚えてなさい!」

大声で叫び、連行されるオルコット、ざまあ。

「帰るか。」

「そうだな。」

そして一日が終わった。

10話 閑話（前書き）

その時のノリで書いてしまった事に反省と後悔。

あとは一夏視点にしてみる練習。

取り敢えず消せないのをおいときます。

この話で出た主人公の特徴等の設定は永遠に関係ありません。要は何って没なのです。

あとタイトルはイベント時と閑話だけつけときます。

10話 閑話

よう、俺だ。

試合の後倒れるような形でベットに入っただのはいいんだが、飯を食ってねえ。

とういわけですばらく寝たら一夏が起こしてくれた。

こいつが家にいたら丸一日ダラダラできるんだろう。

きつと親は大助かりだろう。

「なにぼーつとしてんだよ半、さつさに行かないと食堂閉まっちゃうぞ。」

「はいはい、わかったわかった。」

「はい、は一回な。」

「はいはい。」

（食堂）

side一夏

ええと、はじめまして、織斑です。

今は、半がずつと寝てたから起こして食堂に来たんだが…

なんと言うか、この光景が何なのか分からない。

このやや長めの黒い髪をした俺の男友達は、人間の体に入りきらないであろう、この食堂の隠しメニューをほとんど食いつくし、挙げ句「おかわりしたい。」などと言いつ出す。

まず、状況を整理したい。

始めに、俺達は食堂に来て、食券を買った。

しかし、そこからこの友人はおかしかった。

おもむろに食券の機械の一番右下、何も書いてないボタンを押す。
すると出てきた『EX定食』なるものの食券。

それを食堂のおばちゃんに渡す時の旋律と言わんばかりの表情。

「ご注文は…こちらで本当によろしいでしょうか？」

10話 閑話（後書き）

「ああ……これで問題無い。」

そしてその後厨房から聞こえた、

「その食券、受け取ったあ!!」

というおばちゃんの声。

その時、俺は何なのか全く分からなかった。

しかし、その後に見たものに恐怖すら覚えた。

カレー、ラーメン、天丼、ハンバーグ、からあげ、サラダ、餃子、

e t c …

その品々の形はいつも見るものと同じだが、その一つ一つが企画外のサイズのその定食？をたいたげる半。

その二つの衝撃を受けた俺の箸は完璧に止まっていた。

そして状況の整理が済んだ頃には半は定食？を食べ終わり食後のデザート満喫する半と、食堂のすみっこで燃え尽きたおばちゃんが目に入った。

体のどこに入ってたんだよ。

「腹八分目ってどこか。」

「なあ半。」

「なんだよすがすがしい顔しやがって。」

「人類って神秘的だな。」

10話（前書き）

Vita買った！

文字数増えた！

壊れた！

交換した！

そんな感じの正月でした。

かなり遅れて明けましておめでとつございます。

今年もどうか御慈悲を！

10話

ああ、どうも、俺だ。
シャワーなう。

飯喰ったら眠たくなった。ってわけで寝る前は風呂！！
っと思ったら大浴場ってことで使えねえ。
ちなみに一夏はそれ聞いてかなり凹んでた。
ってことでシャワー浴びてたら忘れ物。
着替え忘れてた。

東夷さん最大の不覚？？？なんてのは置いといて。
一夏に取ってもらうのも悪いし仕方なく腰にタオルを巻いて出る。
んでまあ、ここで忘れてた。俺の場合は駄目なんだった。
見るこの一夏の顔。
まさに壮絶って感じだな。
なんでかって？見てたら分かるさ。

side 一夏

おかしい。
明らかにおかしい。
何って半がだ。
別に半裸で上がってきたことじゃない。
いやそれはそれでいろいろまずいけど。
そうじゃない。

なんでこいつの体にはこんなに傷痕まみれなのか。ってことだ。
それも、ただ喧嘩とかしただけで付く傷痕じゃない。
切り傷の痕、火傷の痕、殴られて血が出たような痕、縛られすぎて

血が出たような痕、その他にもなにを使ってつけた傷かわからないようなのもあった。

「なんだよ????それ????」

「何でもないただの傷痕だ、だから気にするな。」

「何でもあるだろ!なんだよそれ!」

適当にあしらおうとする半に俺は怒鳴った。

「なんで何も話してくれないんだよ!」

「話したくないからだよ。」

「だから何でなんだよ!」

「思い出すからだよ。」

「??????何をだよ」

「??????そんなに聞きたいのかよ」

真面目に半は聞いた。

その表情はからは怒り、苛立ち、悲しみ、などの負の感情しか読み取れなかった。

「??????ああ、話してくれ。」

「はあ、もういいよ、話してやるよ、俺の昔話。」

11話（前書き）

今までで多分一番長く、そして今までで一番グダグダ?????0
r z

本当に文才が欲しい。

誕生日とクリスマスには文才を頼んどこう。

11話

あるところに、とてもとても栄える家系がありました。

その家にはある言い伝えがありました。

それは、「女の当主となる代は必ず栄える。」と言うものでした。その伝承はほとんど本当の話でした。

その家に産まれた娘は、代々各分野で偉大な功績を残していきました。

しかし、その家に産まれた息子は、大した功績を残せず、やや平凡な人生を送りました。

その家の名は楷岑かいしんと言いました。

ISが世界に登場する少し前、その家に歪んだ心をもった少女が産まれました。

その少女の頭の中にはある図が出来上がっていました。

その図とは、自分以外「無能な屑」という物でした。

そしてその少女の心は変わることなく、少女は大人になりました。

そうしてやがて子孫を残す為だけにある男性を選び、そして子供を産み、男性を捨てました。

そうして産まれた子供は男女の双子でした。

女の子には先を見据えて生きるという意味と、長生きしてほしいと言う願いを込めて仙覚という名前を、

男の子には、双子の片割れと言うだけの意味をつけて半と名付けました。

仙客は、それはそれは大事に育てられていました。

しかし弟の半は、それはそれは酷く扱われました。

殴られ、蔑まれ、比べられ、傷付けられました。

そんな事実、学校の生徒にもゆっくりと広がって行き、少年の味

方は何処にもいませんでした。

そんな日々が続いていき、少年はいつしかこう思うようになっていました。

自分が虐められるのは、きっとこれが「普通」なのだ、と。

自分は蔑まれる為に産まれて、殴られながら成長して、死ぬために生きているのだ、と。

そんな日々が終わりを告げたのは、突然の事でした。

ある日、母親の会社の不祥事が発覚し、それに伴い半のことも発覚。その上母親の様々な行為が表に出ました。

密輸品や麻薬の売買、暴力団やテロリストへの資金援助

いくつもの罪状が上がり母親は死刑。

半と仙客は里親に預けられ、離れ離れになりました。

そうして少年は東夷を名乗り、ゆつくりと育ちました。

少年の考え方は、本当の「普通」と呼べるものにゆつくりと戻っていききました。

しかし少年は言います。なぜ考え方が変わったのか、それはただ「そうしろと言われたからだ。」と。

11話（後書き）

お読み頂き有り難うございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6924y/>

黒鬼の獄門番（仮）

2012年1月15日01時51分発行